

低い遊べる場所をリストアップしている。松林の活用に向けて整備に取り組むことが今後我々が行なうべき活動であると考えている。

振り返って

いわき地域環境科学会には自然エネルギーワーキンググループがある。津波被害はある程度物理的に対応できるが、原発の場合は目に見えない。ホットスポットがいたる所にある。私個人の考えとしては、原発に依存しないような社会にしていけないといけないと思う。あるセミナーで話されていた「地産地消のエネルギー」は大きく賛同できる考えだ。この事故をひとつの契機にして、自分たちでエネルギーを作り出す、そのことを通じてエネルギーの在り方や、いかに無駄遣いをしていたかを反省することができる。大震災を風化させな

いよう、町づくりの在り方、環境に対する向き合い方も考えていかなければならない。

これまでエネルギーの問題を切実には考えていなかったように思う。行政に任せっぱなしにしてしまうと他人事になり、受け身になる。今は自分たちのエネルギーは自分たちで作る、自分たちの環境は自分たちで守るというスタンスに立てる状況にあると思う。忘れてはいけないというかけ声だけではなく、現実的な手段を手に入れて展開していく、その一つの有力な手段が自然エネルギーではないだろうか。身の丈に合ったエネルギーの利用を広めることで、今回の大震災・原発事故の教訓の風化も防げるだろう。それは今後のまちづくりの在り方、国民生活の在り方にまでつながっていくのではないだろうか。

NPO

放射能に対する緊張感が薄れていくことも危険。

福島市

清水 義広 阿部 浩美 NPO 法人市民放射能測定所

取材日 2012.08.02

CRMS 市民放射能測定所は、放射能防護のための活動をするNPO法人。食品の放射能測定と、ホールボディカウンターによる体内残留放射能測定を中心に、福島市で市民の手による自発的な活動をしている。市民からの測定依頼を受け付けるとともに、広く情報を共有するために測定したデータはWeb-site等で公開している。

3月11日 14時46分

【清水さん（写真右）】宮城県の丸森町に住んでいる。震災当日は選挙の事務を手伝っていて、選挙事務所の中で震災に遭った。そんなにびっくりはしなかったが、時間が長かったのでただ事ではないなと思った。すぐに停電になったため、車を持ってきてカーラジオをつけた。「仙台湾で津波の高さ10m」という放送を聞いたが想像できず、信じられなかった。

【阿部さん（写真左）】私は東京で仕事をしていた。東京でも揺れは凄かったし時間も長かった。すぐに仕事場近くの主婦たちが外へ飛び出してきた。ツイッターで仙台駅のホームの標識が落ちている画像を見て目を疑った。テレビで仙台空港に津波が押し寄せる映像や、逃げる車を追う津波の映像を見てとんでもないことが起こったのだと感じた。



福島第一原発事故

【清水さん】丸森でラジオを聞いて知った。うまく想像できなかった。福島なのでもう少し遠いだろうと思っていたが、後になって調べてみたら意外と近かった。逆に女川のことが報道されず、福

島の報道ばかりだったので女川は大丈夫なのかと心配していた。

【阿部さん】放射線・放射能に対する知識もなかった。実家は福島市にある。60kmも離れているから大丈夫、程度に思っていた。爆発事故が起こるまで原発のことは頭になく、津波によってあのような状況になるということは考えもしなかった。

測定所設立のきっかけ

【阿部さん】2011年5月1日に子どもたちを放射能から守る福島ネットワークを組織し、当時の文科大臣、政府三役へ20ミリシーベルト基準の撤回を求める活動から始めた。子どもたちを放射能から守る福島ネットワークのなかには情報共有班、保養班、放射線を測る測定班など4つの班がある。首都圏から福島の状態を見て、現理事長の丸森あや氏と現理事の岩田渉氏が測定班にボランティアで参加してくれた。線量計を持って来て、福島県内各地の空間放射線量を計測して歩いた。その後文科省へ行き、1ミリシーベルトへの基準見直し交渉を行なったが、その日のうちに結論は出なかった。だが、5月27日に文科省より「学校において、当面、年間1ミリシーベルト以下を目指す」という発表があった。

翌週の日曜日にチェンバ大町で食品測定イベントが行なわれた。フランスのCRIIRADというNGOから一番簡単な食品測定器を借り、持ち寄った食品をその場で測ると、ものすごい反響があった。空間を測るのも大事だが、消費者は今ある食べ物の値を知りたいのだと知り、食品を測る測定所が必要だと話し合った。こうした経緯で岩田渉氏、丸森あや氏、子どもたちを放射能から守る福島ネットワークの測定班が中心となり、2011年7月に「市民放射能測定所」が設立された。

測定を始めて

【阿部さん】実家も福島で農家をやっている。インターネット上の情報では暫定基準値500ベクレルと掲載されていたが、チェルノブイリの事例から考えると500を食べていいとは全く思えなかった。行政でも数値を測っているが、500ベクレルを超えたものについては出荷自粛を要請した等の報道はあっても、下回っている食品の具体的な数値は公表されなかった。検査依頼は、新米と果物の時期の11月から12月がピークだった。現在は落ち着いている。

【清水さん】依頼では、自家用に作ったが家族が食べてくれないので測って欲しいという依頼が多

かった。

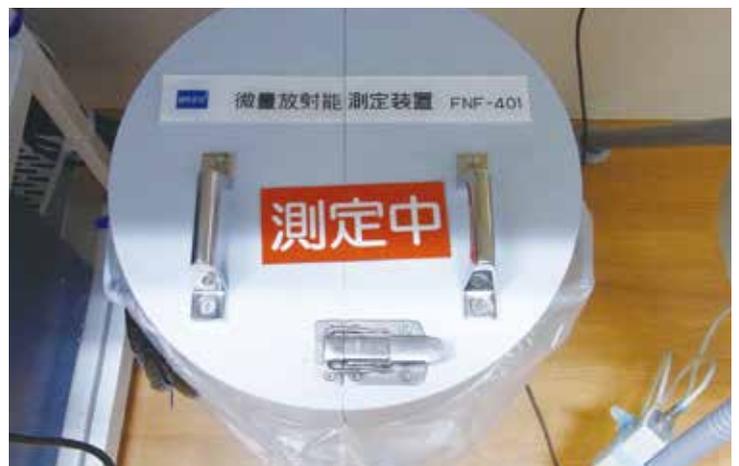
【阿部さん】行政や農協の場合20ベクレルより下回ったら不検出となるが、それよりも下の数値を求められることもある。ここではもっと低い数値も出せるので、たとえば出荷するにあたってネット通販等で数値を聞かれた時のために測ってほしいとの依頼もあった。検査にあたっては1kg分が必要で、これを用意するのが大変なようだ。お米であれば検査後再利用できるが、切り刻ぎんでしまうとどうしようもない。また、家庭菜園で1kgはなかなか用意できないこともある。去年はそれでも検査したいという緊張感があったが、最近ではそうでもなくなってきた。

【清水さん】ホールボディカウンターは2011年10月から開始した。始めた当初は凄いい件数だったが、こちらも現在では落ち着いている。思ったより低い値で安心している。個人的な思いだが、結構内部被曝しているのではと予想したが、計測してみても値が低かったことは意外といえば意外だった。まだわからないことの方が多いので率直に安心とは言えない。初期被曝しても放射能は体から出ていく。ヨウ素なども半減期が短いので消える。今は体の中には入っていないが、事故当時はわからない。だが、今の段階ではほとんど検出されないことで、一定の安心はしてもらえと思う。

【阿部さん】去年の秋は測定できるところが限られていたので福島全域や避難先からも計測に来たが、行政も同じサービスを始めたこともあり今年は福島市内からの人が多い。

活動に携わるきっかけ

【清水さん】2011年3月下旬には空間線量を測る機械を手に入れ、丸森の有機農業をやっていた



微量放射能測定装置

仲間と近所の線量を計測していた。最初の頃は怖くて福島に入れなかった。6月くらいから子どもたちを放射能から守る福島ネットワークのイベントの手伝いを行なうようになったのがきっかけだ。

【阿部さん】2011年8月に京都大学助教の小出裕章さんの講演会が福島であり、参加した。そこで再開した同級生が、子どもたちを放射能から守る福島ネットワークと市民放射能測定所で活動していて、彼に誘われたのがきっかけだ。

【清水さん】福島県内に測定所ができてきて、測定を依頼する人が減ってきている。緊張感が薄れていくことも危険なので、どう啓発していくかが課題だ。

震災を振り返って

【清水さん】事故当時の政府の原子力問題への対応について、マスコミも政府から言われたことを伝えるだけではなく、自分たちの基準で発言してもよかったと思う。結局、避難するか・しないか

は自分で決断しなければならない。政府をあてにせず、自分の身を守るのは自分の判断なのだ。市民の力で変えていかなければいけないと、デモも盛り上がっている。現在は放射能の問題は落ち着いているが、表面化するのは数年後だ。事故になった時、放射能に対する知識があるかないかで行動は大きく違ってくる。原発付近に住んでいる人は予め知識を得ておかないと、自分の身は守れない。事故が起きてから勉強しようとしても間に合わない。初期被曝をいかに避けるかが大事だ。

【阿部さん】これまで漠然とながら国を信用していなかったが、今回の震災で確信が変わった。自分の身は自分で守らなければならないというのは同感だ。一時東京に出ていたが、震災を機に自分の地元・故郷を再認識し、福島に戻ってきた。自分の生まれ育った場所がこういうことになり、地元への思い入れが再確認できた。都市の繁栄を維持するために存在している田舎。原発に代表されるように、受け入れなければならないことはあまりに割が合わな過ぎるのではないか。一度事故が起きてしまえば自分の子どもが死ぬまでも帰って来れなくなる場所になってしまう。その点を、踏み込んで考えるべきだと思う。

NPO

環境カウンセラーとして伝え続けた被災地の状況

南相馬市

長澤 利枝 NPO 法人福島環境カウンセラー協会

取材日 2012.09.11

地球環境の保護・改善に対して、行政、事業者、市民団体及び一般市民などと連携し、環境保全意識の高揚、環境経営の構築・推進、人材育成等の方策に関する事業を行ない、現在及び将来に係る人類共通の課題である地球環境保全に寄与することを目的に設立された。震災後は避難所を訪問し避難者のメンタルケアを中心に様々な支援活動を行ってきた。

3月11日 14時46分

別棟の2階で書道教室を開いている。教室の準備をして生徒を待っている時、地震が来た。初めはたいしたことはないだろうと思ったが、やがてもの凄い揺れとなり、慌てて外に出て母屋に戻った。自宅は高台にあり、母屋からは海が見渡せる。3時30分頃、夫が海の方に真っ白な砂埃を見た。松の木よりも上まで舞い上がっているのを見てあれは何だろうかと首をひねっていた。そのうちに高台を目指して逃げてきた人の車で隣の空き地はいっぱいになった。

みんなが海の方を見ていた。直後に津波の第一波が到達し、その様をただ呆然と見ていた。国道6

号線より太平洋側の地区は壊滅状態となった。その夜は空き地に避難してきた人たちのために2階を開放し、何とか用意できたおにぎりを食べてもらって一晩を過ごした。

逃げてきた人たちに聞くと、防災無線は聞こえなかったという。この地域の人たちは過去にも津波の経験がほとんどなく、来ても50cm程度位の認識だ。大丈夫だろうと自宅に残っていた方たちが皆犠牲になってしまった。逃げてきた人たちは第一波を見ながら逃げてきたという。私の住んでいる地区でも30人近くが亡くなった。まさに想像を絶する光景だった。

津波が引いた後、書道教室に兄妹で通う生徒の両親と祖母が訪ねてきた。祖父が学校まで迎えに